

[論文]

夫婦・親子の呼称と家族機能性—短期大学女子学生を対象として—

What family members call each other and family functioning  
of female junior college students

柴田雄企

Shibata Yuki

大分県立芸術文化短期大学

研究紀要 第54巻

2017年3月

[論 文]

## 夫婦・親子の呼称と家族機能性—短期大学女子学生を対象として—

What family members call each other and family functioning  
of female junior college students

柴 田 雄 企  
Shibata Yuki

### ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate the relationship between what family members call each other and family functioning. Participants were 143 female junior college students. They answered questionnaires regarding what family members call each other and family functioning (family cohesion and family adaptability). As a result, families in which daughters called their fathers “papa” were significantly higher in family cohesion and family adaptability than families in which daughters called their fathers “*Otosan* (father)”. And families in which daughters called their mothers “mama” were significantly higher in family cohesion than families in which daughters called their mothers “*Okasan* (mother)”.

Key words: what family members call each other, family cohesion, family adaptability,  
female junior college students

### 問題と目的

相手のことをどう呼ぶかは人間関係と深く関わっており、コミュニケーションにおいて重要であると考えられる。親友を呼び捨てにしたり、目上の人に敬称を用いたり、呼称にはお互いの人間関係が反映されることもある。

家族内の呼称も、それぞれの家族によって違いがあると考えられる。都留（1956）は、大阪府及び兵庫県内の小学5年生の男女を対象に、家族の呼称について調査している。結果、夫から妻では名前の呼び捨てが最も多く、次いで、「お母ちゃん」「お母さん」が多かったことや、妻から夫では「お父さん」「お父ちゃん」が多かったことなどを報告している。

現代の家族は、少子高齢化や家族成員の減少などにより家族形態が変化してきたと言われている。家族の呼称にも変化がみられるだろうか。本研究の目的の1つは、家族がお互いをどのように呼んでいるのかについて調査することである。

一方で、呼称が人間関係に影響することもあると考えられる。家族の呼称の違いが、家族の人間関係に影響することがあるのではないだろうか。横谷（2008）は家族の呼称と家

族関係について、逸脱呼称のある家族には暴力が多い傾向があることを報告している。本研究では、家族の呼称と家族の凝集性や適応性との関係について検討することも目的とする。

家族凝集性とは、家族メンバーを結びつける情緒的親密さをあらわす概念である。それぞれの家族は、家族凝集性が非常に高い状態（纏綿状態）と非常に低い状態（遊離状態）を両極端とする連続直線上のどこかに位置づけられるとされている。

家族適応性とは、家族システムの勢力構造や役割関係を状況や危機に応じて変化させる能力をあらわす概念である。

本研究では、夫婦間および親子間の呼称について調査し、夫婦・親子の呼称と家族凝集性および家族適応性との関連があるのかを検討することとした。

## 方法

短期大学生を対象に質問紙調査を3回にわたって実施した。分析対象は短期大学女子学生143名（平均年齢は18.82才）。第1回調査は2013年11月に実施した（57名）。第2回調査は2015年1月に実施し（45名）、第3回調査は2016年1月に実施した（41名）。

質問紙の内容は以下の通りである。

### 1. 基本属性

年齢、性別。

### 2. 家族内の呼称

横谷・長谷川（2009）の調査方法を参考にし、夫婦同士および親子同士の呼称を尋ねた。「父から母」、「父から自分」、「母から父」、「母から自分」、「自分から父」、「自分から母」に対する呼称について、呼ぶ人、呼ばれる人の表を作成し、自由記述による回答を求めた。呼び方が複数ある場合は、最もよく使うものの回答を求めた。

### 3. 家族機能測定尺度

凝集性と適応性を測るため、草田・岡堂（1993）が、オルソンら（1985）のFACESⅢを和訳して作成した家族機能測定尺度（日本語版FACES）を用いた。これは、凝集性尺度10項目（「私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める」、「私の家族は、みんな何かをするのが好きである」など）と、適応性尺度10項目（「私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変えている」、「家族の決まりは、必要に応じて変わる」など）の計20項目から成る。

評定は5件法で求めた（「まったくない（1）」、「たまにある（2）」、「ときどきある（3）」、「よくある（4）」、「いつもある（5）」）。20項目のうち2項目は逆転項目となっている。

この尺度では、凝集性と適応性の2つの次元において、ともに極端な値をとらない時に、家族機能の健康度が高いと評定される、カーブリーニア性を仮定している（鈴木・小川、2000）。

## 結果

### 1. 家族の呼称

家族（父、母、子）のお互いの呼称を筆者が分類した。分類カテゴリーは「普通名詞①」（お父さん、お母さん等）、「普通名詞②」（パパ、ママ等）、「固有名詞」（名前）、「あだ名」（ニックネーム）、「呼びかけ」（ねえ、おい等）、「逸脱」（無規程、奇異）、「その他」とした。分類カテゴリーの作成にあたっては、都留（1956）および横谷・長谷川（2009）を参考にした。逸脱した呼称の無規程な呼称とは、相手との関係を全く考慮せずに使用される呼称のことである。例えば、子どもが親を「お前」と呼ぶ場合が該当する（「お前」という呼び方は父親だけではなく、誰に対しても使用できる）。奇異な呼称とは、相手との関係を奇異に規定する呼び方である。例えば、成人した娘が自分の母親を「田中さん」などと過度に形式的な表現で呼んだりする場合が該当する。

#### (1) 夫婦間の呼称について

##### ① 母から父

「母から父」に対する呼称（母親が父親のことを呼ぶ呼称）は、「お父さん」等が69名（55.2%）であり、「パパ」が33名（26.4%）で、名前が3名（2.4%）、「あだ名」が6名（4.8%）、呼びかけ（ねえ、ちょっと）が4名（3.2%）、逸脱（○○ちゃん、○○くん等）が10名（8.0%）であった。

##### ② 父から母

「父から母」に対する呼称は、「お母さん」等が61名（51.7%）、「ママ」等が22名（18.6%）、名前が21名（17.8%）、あだ名が1名（0.8%）、呼びかけが6名（5.1%）、逸脱（○○ちゃん、○○さん、あの人等）が6名（5.1%）、その他（おくさん）が1名（0.8%）であった。

#### (2) 父娘間の呼称について

##### ① 父から娘

「父から娘」に対する呼称は、名前が115名（92.0%）、あだ名が8名（6.4%）、呼びかけが1名（0.8%）、その他（姉ちゃん）が1名（0.8%）であった。

##### ② 娘から父

「娘から父」に対する呼称は、「お父さん」等が97名（74.0%）、「パパ」等が28名（21.4%）、あだ名が3名（2.3%）、逸脱（おっちゃん、名前、呼ばない）が3名（2.3%）であった。

#### (3) 母娘間の呼称について

##### ① 母から娘

「母から娘」に対する呼称は、名前が130名（94.9%）、あだ名が5名（3.6%）、逸脱（あんた）が1名（0.7%）、その他（姉ちゃん）が1名（0.7%）であった。

##### ② 娘から母

「娘から母」に対する呼称は、「お母さん」等が104名（74.3%）、「ママ」等が31名

(22.1%)、名前が3名(2.1%)、あだ名が2名(1.4%)であった。

## 2. 家族の呼称による家族機能性の比較

家族機能性(凝集性、適応性)を、家族の呼称によって比較した。

### (1) 夫婦間の呼称と家族機能性

#### ① 母親が父親を何と呼ぶかによる比較

母親が父親を何と呼ぶかによって、家族機能性(凝集性、適応性)を比較した(表1)。

表1 「母→父」の呼称による家族機能性の比較

	お父さん (n=69)	パパ (n=33)	名前 (n=3)	あだ名 (n=6)	呼びかけ (n=4)	逸脱 (n=10)
凝集性	30.35 (7.78)	37.45 (8.43)	34.00 (1.73)	34.50 (5.89)	25.00 (8.52)	29.80 (9.92)
適応性	27.91 (5.41)	31.06 (7.33)	28.33 (6.81)	34.50 (4.32)	25.75 (6.40)	28.30 (4.52)

#### ② 父親が母親を何と呼ぶかによる比較

父親が母親を何と呼ぶかによって家族機能性を比較した(表2)。

表2 「父→母」の呼称による家族機能性の比較

	お母さん (n=61)	ママ (n=22)	名前 (n=21)	あだ名 (n=1)	呼びかけ (n=6)	逸脱 (n=6)	その他 (n=1)
凝集性	30.87 (8.34)	38.50 (7.85)	31.95 (7.60)	33.00	28.00 (7.32)	31.50 (11.29)	42.00
適応性	28.80 (5.72)	31.00 (7.13)	28.52 (6.33)	30.00	25.00 (7.87)	31.67 (5.35)	25.00

### (2) 父娘間の呼称と家族機能性

#### ① 父親が娘を何と呼ぶかによる比較

父親が娘を何と呼ぶかによって、家族機能性を比較した(表3)。

表3 「父→娘」の呼称による家族機能性の比較

	名前 (n=115)	あだ名 (n=8)	呼びかけ (n=1)	その他 (n=1)
凝集性	32.10 (8.43)	37.75 (6.94)	15.00	32.00
適応性	28.91 (6.29)	31.38 (3.11)	21.00	32.00

②娘が父親を何と呼ぶかによる比較

「お父さん」、「パパ」、「あだ名」、「逸脱」の間で、家族機能性に違いがあるか検討するため、一元配置の分散分析を行った(表4)。結果、凝集性 ( $F(3, 127) = 5.52, p < .01$ )、適応性 ( $F(3, 127) = 3.62, p < .05$ ) のいずれにおいても有意差がみられた。凝集性、適応性のいずれにおいても、「パパ」の方が「お父さん」よりも高かった。

表4 「娘→父」の呼称による家族機能性の比較

	お父さん (n=97)	パパ (n=28)	あだ名 (n=3)	逸脱 (n=3)	F 値	多重比較
凝集性	30.71 (7.92)	36.64 (8.61)	41.33 (7.64)	28.00 (6.25)	5.52 **	パパ>お父さん *
適応性	28.06 (5.85)	32.07 (6.26)	31.67 (1.53)	27.33 (6.81)	3.62 *	パパ>お父さん *

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

(3) 母娘間の呼称と家族機能性

①母親が娘を何と呼ぶかによる比較

母親が娘を何と呼ぶかによって家族機能性を比較した(表5)。

表5 「母→娘」の呼称による家族機能性の比較

	名前 (n=130)	あだ名 (n=5)	逸脱 (n=1)	その他 (n=1)
凝集性	32.15 (8.35)	37.00 (7.11)	21.00	32.00
適応性	28.79 (6.20)	32.20 (1.92)	22.00	32.00

## ②娘が母親を何と呼ぶかによる比較

「お母さん」、「ママ」、「名前」、「あだ名」の間で、家族機能性に違いがあるか検討するため、一元配置の分散分析を行った(表6)。結果、凝集性 ( $F(3, 136) = 5.37, p < .01$ )、適応性 ( $F(3, 136) = 3.43, p < .05$ ) のいずれにおいても有意差がみられた。

表6 「娘→母」の呼称による家族機能性の比較

	お母さん (n=104)	ママ (n=31)	名前 (n=3)	あだ名 (n=2)	F 値	多重比較
凝集性	30.72 (7.74)	36.55 (8.48)	27.33 (9.61)	40.50 (10.61)	5.37 **	ママ>お母さん *
適応性	28.36 (5.66)	31.39 (7.26)	22.33 (1.53)	31.00 (1.41)	3.43 *	ママ>お母さん + ママ>名前 +

+ $p < .10$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

## 考察

## 1. 家族の呼称について

結果から、夫婦間の呼称については、母から父では「お父さん」が55.2%、「パパ」が26.4%、父から母では「お母さん」が51.7%、「ママ」が18.6%と多かった。これらの父母は対象者を子どもとする夫婦なので、子どもを持つ夫婦であるため、子どもとの関係を反映した呼称が多かったのだと考えられる。

親子間の呼称についても、娘から父では「お父さん」、娘から母では「お母さん」という呼称が最も多く使用されていた。次いで、「パパ」、「ママ」が多かった。都留(1956)の調査では、親を「パパ」、「ママ」と呼ぶ子ども(小学生)はほとんどいなかったことから、「パパ」「ママ」という呼称は、この半世紀の間に普及したと考えられる。親が子どもを呼ぶ呼び方は名前が90%強であった。

家族内における父母の呼称は、普通名詞が主なものであるといえる。また、夫婦間の呼称の方が、親子間の呼称より多様であり、呼びかけや逸脱がやや多くみられた。これは、親子より夫婦の方が共に過ごした時間が長く、関係性にも変化が生じる機会がより多いためと推測される。

## 2. 家族の呼称と家族機能性について

本研究では、家族の呼称と家族機能性との関連を検討し、子どもが親を「お父さん」、「お母さん」と呼ぶ家族より、「パパ」、「ママ」と呼ぶ家族の方が凝集性、適応性ともに高い傾向があることが示唆された。この理由としては、「パパ」、「ママ」と呼ぶ家族は、子どもが幼児の時から、その機能性における変化が少ないということが推測される。大野木(2015)によると、中学生頃には、「パパ」「ママ」と呼ぶことをやめる子どもたちがあられるとのことである。「パパ」、「ママ」の呼称を使い続けている家族は、家族みんなで一緒に行動する傾向(凝集性)が強いままなのかもしれない。適応性についても、役割

が固定せず、柔軟なままであるのではないだろうか。

ただ、家族の凝集性、適応性は固定したものではなく、時間的に可変なものであることには留意しておく必要がある。ミニューチン（1983）は多くの家族が、その成長過程で一時的に纏綿（膠着）状態や遊離状態になる傾向があることを指摘している。例えば、家族の誰かに問題が生じた時、一時的に遊離状態から纏綿（膠着）状態へ移行することは自然なことであるという。

日本語版FACESでは、凝集性は遊離（10-24）、分離（25-31）、結合（32-38）、膠着（39-50）の4つに分類されており、分離と結合はバランス群、遊離と膠着は極端群とされている。家族の呼称と家族機能についての結果（表1～表6）をみると、ほとんどの場合がバランス群であった。凝集性の低い遊離に該当していたのは、父が娘を「呼びかけ」で呼ぶ場合と、母が娘を「逸脱」呼称で呼ぶ場合であった。また、凝集性の高い膠着に該当していたのは、父が母を「ママ」と呼ぶ場合であった。

適応性は日本語版FACESでは、硬直（10-23）、構造化（24-28）、柔軟（29-34）、無秩序（35-50）の4つに分類されており、構造化と柔軟はバランス群で、硬直と無秩序は極端群とされている。家族の呼称と家族機能についての結果（表1～表6）をみると、ほとんどの場合がバランス群であった。適応性の低い硬直に該当していたのは、娘が母を「名前」で呼ぶ場合、父が娘を「呼びかけ」で呼ぶ場合、母が娘を「逸脱」呼称で呼ぶ場合であった。適応性の高い無秩序に該当していたのは、母が父を「あだ名」で呼ぶ場合であった。家族の呼称によって家族機能性に違いがみられるとすると、家族の呼称は家族機能性を推測する際に、手がかりの1つになるかもしれない。

本研究の課題としては、呼称のデータが調査対象者である子どもの視点からのもののみであることが挙げられる。夫婦間の呼称は、子どもが同席していない場合は異なっている可能性もあるだろう。

## 引用文献

- 草田寿子・岡堂哲雄 1993 家族関係査定法 岡堂哲雄（編） 心理検査学 垣内出版 573-581
- ミニューチン S. 山根常男（監訳） 1983 家族と家族療法 誠信書房（Minuchin, S. 1974 Families and Family therapy. Cambridge, MA: Harvard university press.）
- Olson, D. H., McCabbin, H. I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. 1985 Family Inventories. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.
- 大野木裕明 2015 呼称の対人的機能 ナカニシヤ出版
- 鈴木久美子・小川俊樹 2000 家族凝集性からみた家族アセスメント尺度：展望 筑波大学心理学研究 第22号 227-234
- 都留 宏 1956 家族呼称からみた家族関係 教育心理学研究 第4巻 第1号 12-20
- 横谷謙次 2008 「逸脱」呼称と家族内暴力に関する一実証的研究—「逸脱」した呼称が「逸脱」した関係を規定することに着目して— 家族心理学研究 第22巻 第1号 14-27

横谷謙次・長谷川啓三 2009 「逸脱した」呼称の定義 東北大学大学院教育学研究科研究  
究年報 第58集 第1号 197-208